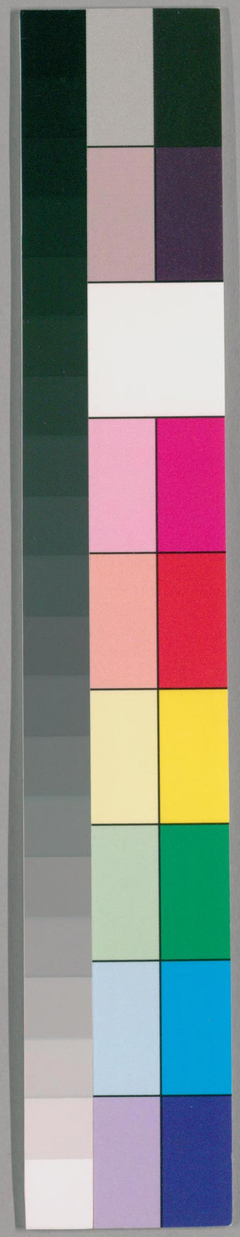
貞丈祭典之扣

841
143



国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143

ガラス使用

841
143

貞丈雑記之抄

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用

伊勢雨秀貞丈之作

男貞輝

男貞輝

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用

伊勢采蕎貞丈之作

根岸信輔氏寄贈
根岸憲助氏奈託本

男貞輝

男貞輝

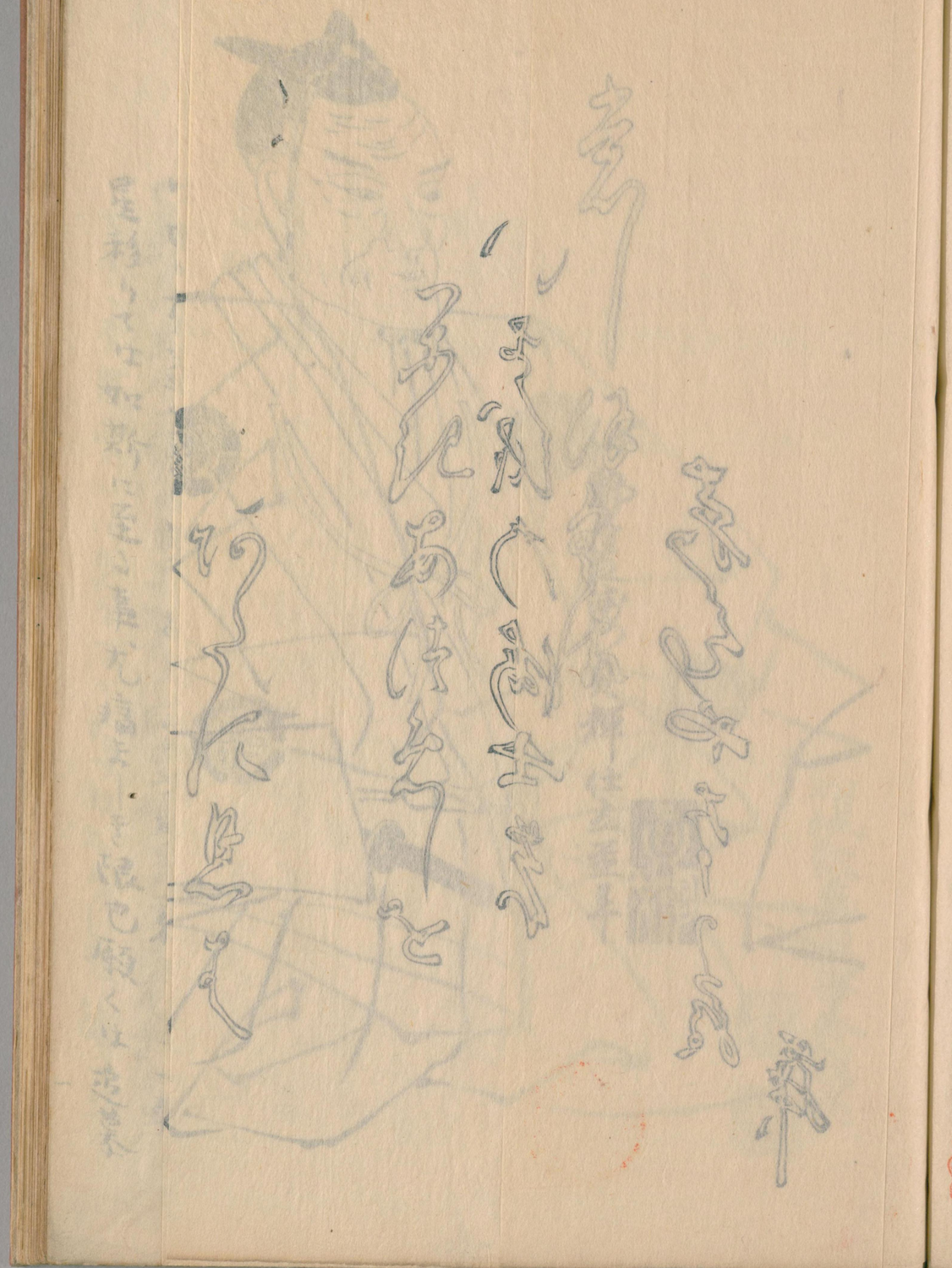
恭次郎印

西之久保大養寺所藏

明治廿年十二月

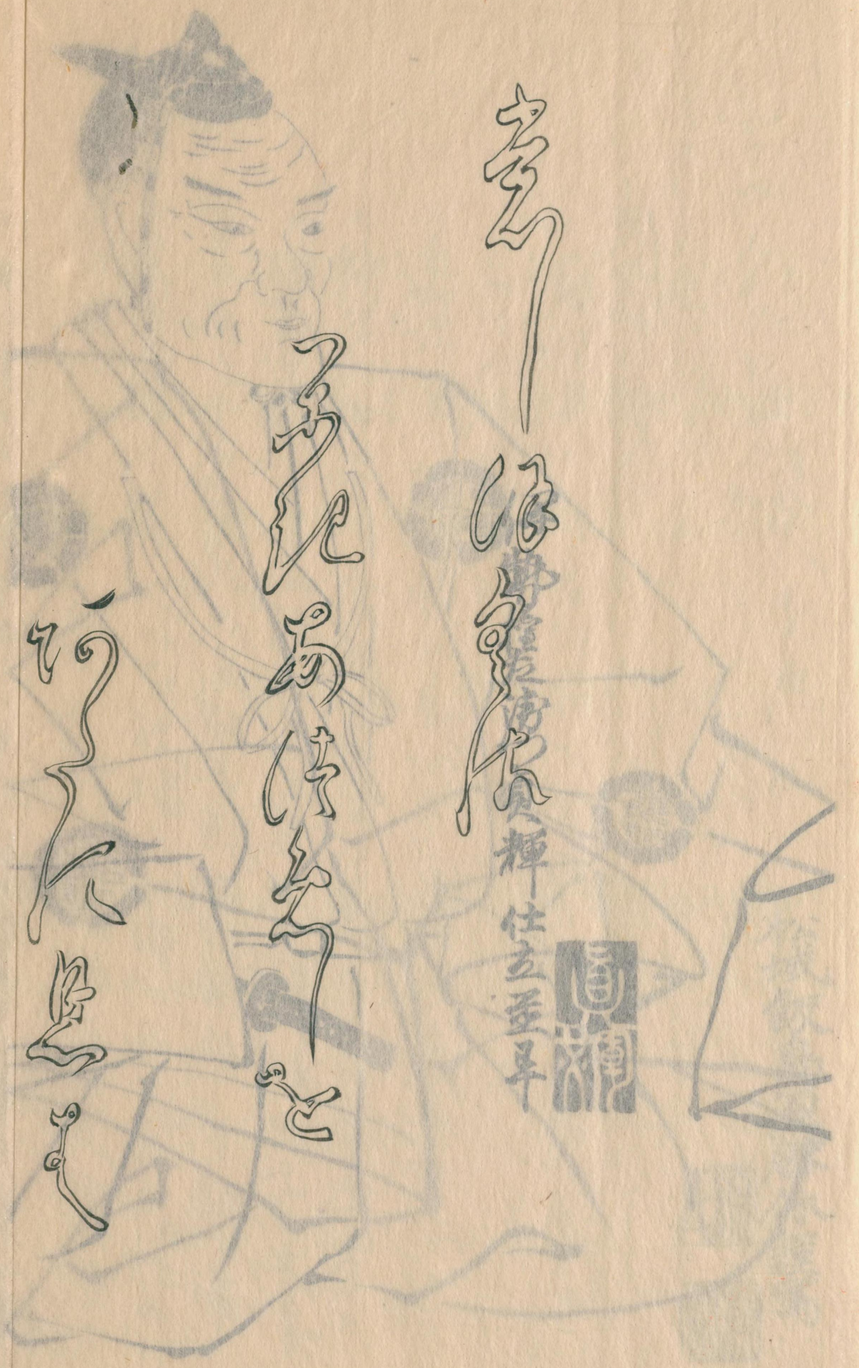
借来りて廿一年六月十一日

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用

伊勢檀左衛門貞輝仕立並早

松城飯島源勝休謹寫

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用

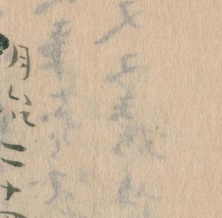
国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用

貞丈祭典の扣

明治二十四年

我禮節の師有住齊（ヒトシ）が女鑑といふ雜誌にて廣告せられし樣



室町將軍の代には殿中奉行を勤仕し舊幕府にいたりて旗下の士となり食祿三百石を賜りて連綿襲せしたる伊勢家代々の墓碑は芝區西之久保八幡町なる大養寺に有りしが維新以來嗣子駿府に移住して顧る事なきに至りしより大かた破壞して僅に貞丈翁夫婦の墓碑のみ野草に埋れて殘れり嗚呼安永天明の頃には世に有益の書を著し故實家名譽と稱せしも一朝星移りては如斯に至る事尤痛ましき限也願くは追慕

帝國圖書館藏

いし井 恭次郎印

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143

ガラス使用

の諸君共に一臂の力を貸し祠堂金若干を寺僧に與へ此夫婦の墓碑未現存せるを保存して世に長く殘し止めしめよとはかる事しかり

野生年來故實を穿鑿して此翁の恩頼を蒙りし事許多なれは謝辭として此念を起さといへども微力にして盡さ能はざ女鑑の余白を汚して有志諸君の助力を俟のみ

東京麻布我善坊町廿一番地

有住齊謹白

明治廿四年十一月

この時師とうちかたらひし友どち助けしこと有しの終に其事ならで、助けんとせし人もおほかたうせ、くはたてし師も又みまかりぬ

其時は未だ我松園の門に入らざりし故この事ありしを知らざ後に師家につきて聞てはしめて此事ありしを知りぬ

我松園の門にそのまゝでおかれ給めしかり三年といふに師がうせおしなり、ことにをしへうけたしめしほどより師が病重くなりもくがまゝに思ふまゝにをしへうけし事なりき

あるとき師々遺稿の下にのさねたる反古の中に右の墓碑の設計の圖有るを見出しぬ、いはれたる如く貞丈翁夫婦と今一ツの墓碑の圖にして三墓をならべて、めぐりに石垣をつきゝてたる樣なり

この圖の樣と、右の廣告の詞によるに、伊勢家御代々の事ゆゑ、はさるが如し、こは御代々の墓碑を見出ざりし故なるべし

我はしめて大養寺をとひし時、桶つくる職人の家にてきゝて、其墓所城に至りつゝたつねたりしに、翁の志

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

るしハ既に安齋遺竹みかしれたるが早くたつねあてつ
其貞城の志るしみハ

天明四年甲辰　（行年七十歳ナリ）

伊勢平藏平貞丈墓

六月五日　長逝

安齋遺竹みのある所の躰、さて其へにむかひ見て右の
となりに貞丈妻と記せる、其左のとなりに貞八鴨と記せ
る志るしならびたてり、夫よりうしろの方を廻りて見られ
貞顯君と貞永君とのみしるし有り、ちこしたちまれて翁が貞
城の左側の方を向きて一つたてり、伊勢谷太郎貞友妻女の
なり、又夫より法花の方へとなりおれて、此方を向けおしして
うしろの方を左側みむけて一つたてり、伊勢兵庫貞益女の

志るしなり、まつ翁の右の方、我善坊の通の方ハ、いさく
あれたる志るしあり、大きなるかたをれふしたるなど、いと
いたましけれバ、なるて又しに、是ならは伊勢家のみて
貞春君貞陳君貞益君貞衛君貞敦君等をたしかな
墓のたま志つれる志るしなりけると、
かくて此よしを師につきてかたらし、あはれ翁の病おもくあり
ける時、言詞も心も思ふかましみ、いたいたしちくるまでなり、さて
そのまゝにてやみぬ。それら一とせかゐどたちてあれたる
み志るしをおこしたて、翁が貞城の側みたてられたる二つを
本意ならぬも引らせまて竹のかき結いせつ、あはれかくせる時
に我と共に此翁がみたまの志つまれる貞城をとふものあらりき
又其後大養寺の院主にうらくひらいせしついでに
過去帳をこれてうつしつる次第。

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

逆修トハ生前ニツクルヲイフト院主イヘリ

延宝三乙卯年
五月廿日
花屋傳才心童子　伊勢兵庫殿子息
二才ニシテ死ス　伊勢金三郎

延宝九辛酉年六月廿八日
利覚信士
利貞信士　伊勢兵庫殿内
双方喧嘩ニテ相果ル　太兵衛事
平助事

貞享元甲子年
五月十三日
幻心童子　当才ニテ死ス
伊勢隠斎子

元禄二己巳年
霜月七日
寶壽照院殿榮譽長閑居士　兵庫殿平四郎殿権之助殿之父
八十五才
伊勢兵庫殿ノ事隠居シテ長閑ト云

享保十九
十二月十二日
隆昌院殿林譽周山光榮居士　伊勢縫殿之丞實父
兵庫殿

逆修
貞壽院殿松譽良閑大姉　伊勢兵庫殿
後室

延享元甲子
八月四日
心月院性円周光大姉　伊セ兵庫殿
実益娘

寛延三庚午歳
四月廿七日
生安即往童子　伊勢平蔵悴

宝暦三癸酉
七月十二日
寂而院妙常日照大姉　伊勢兵庫貞益女
山角四郎右衛門室
浅草海泉寺ニ葬ル

宝暦五乙亥之年
十月十日
威徳院殿儀譽至道居士　伊勢氏平蔵殿弟

明和四丁亥五月朔日寂
智性院殿法譽恵光大姉　伊勢平蔵殿息女

是ヨリ以下[illegible]代
焼香

安永七戊戌年
貞壽院殿松譽良閑大姉　伊勢平蔵殿
御母公

天明元丑年
七月十三日
安譽了慰居士　伊勢登殿

梵殿院殿

天明四甲辰年

圓德院殿長養一道清閑居士　伊勢平氏殿丁

六月朔日　寛八五月廿八日ニ死ス

天明七丁未年　サキノモリ

三月廿七日　伊勢百助殿丁

高顯院殿哲養勇山居士

寛政四子　伊勢万助殿　奥方

八月二日

香蓮院殿熏養涼心大姉　廿五歳

寛政五丑年　相養代　伊勢万助殿　祖母

八月六日

清蓮院殿節養淨貞大姉

文化九申年　伊勢万助殿事

十二月廿四日

寥廓院殿雲寥心無大仙居士　土　六僧

文化十四丑年　伊勢千太郎殿　弟

二月十八日　千治郎殿丁

心源院殿湛寥了達居士　土　四僧

文政四辛巳年　伊勢千太郎殿　召使

六月四日

慧光明消信女　土　三僧

文政六未年　伊勢兵庫殿　母公

十月十四日

幽玄院殿通養觀達妙善法尼　土　五僧

弘化三丙午年　伊勢斧太郎殿　娘

十一月廿五日

香潔院微妙貞孝童女　土　三僧

弘化四丁未　伊勢斧太郎殿　奥方

四月十四日

安養院殿光養徹照妙圓大姉　土　六僧

嘉永二己酉年　伊勢兵庫殿　古文

九月十六日

聖正院殿行譽力精不退居士　土　六僧

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

嘉永二癸丑年 正月七日
清淨院莊養妙嚴大姉 丈 四倍 伊勢谷太郎殿 厄介

安政三丙辰年 十月廿九日
誠心院深養智光大姉 伊勢三郎伯母

安政五戊午年 二月二日
勝珠院梅林幽香童子 伊勢三郎殿 先代 子 五歳ニテ死

文久二壬戌年 八月四日
璟樹院智月自照大姉 二倍 伊勢権左衛門殿 先代子

文久四甲子年 正月廿八日
春暁院覺夢清香童子 四倍 伊勢権左衛門殿 息子 当才

慶應四戊辰年 八月廿一日
諦善院思相分説居士 伊勢

明治八乙亥年 五月二十九日
光顔院明達眞正大姉 四十一歳 伊勢丈妻

同
十月廿五日
容顔院超倫教道居士 二十才 伊勢丈子息

又 一月一日 奥城をとひしときの日記

西之久保大養寺なる伊勢氏の奥城の跪拝して

ここに来て きこをこふれ来て

百年のむかしをとことあれなりにけ利

かくて伊勢系圖のうつしを奥城のみまへにおきて、御

代々の墓標の様をうかゝひて其えりたる文字をうつ

つ

（左側ニ）伊勢ガ平蔵貞丈妻

六

寛政五年癸丑

清運院殿節譽淨貞大姉

八月六日

（右側に）行年七十歳

天明四年甲辰

伊勢平藏平貞丈墓

六月五日

長譽

天明七丁未年

高顯院殿哲譽勇山居士

三月二十六日

（右側に）俗名

伊勢百助平貞暢

延享元年八月四日辛

伊勢兵庫貞益女之墓

名曰満世　號心月院

以上四ッあらびたてり、もとハ三ッなりしを
貞益女之墓べちにありて、いまもも其有所もみしるし
もうせぬべく思ハれしゆゑ、ここにハあハせつるなり

此四ッのうしろに背合（うしろあハせ）にたてるもの三ッ
又べちに他家の一ッ有り、あやまりていれしまや

七

（左側ニ）伊勢谷太郎貞友妻
土方菊一郎雄忠女

弘化四丁未年

安養院殿光譽徹照妙圓大姉

四月十四日

この外志るし無別にたてりしを
こゝにうつせしなり

此間ニ他家ノ墓アリ

（左側ニ）伊勢氏平貞宇

寶永貳て酉歳

善昌院殿白譽珪志林長和居士

閏四月十二日

（左側ニ）伊勢氏平貞永

寶永七庚寅年

諦運院殿宣譽到說長榮居士

三月廿三日

八幅の奥城の向ひに右側を向けてたてる三ツ、又其向ひに右側を向けてたてる三ツ、又其向ひに四ツたてり

其次第ハ上圖ノ如シ

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

（左側ニ）伊勢氏平貞陳

享保十一丙午年

元良院殿　順徳永和居士

六月十四日

享保十己巳年

隆昌院殿　林鑾稠山光塋居士

十一月十二日

（右側ニ）伊勢氏平貞益

元祿二己巳年　神

寶照院殿　榮鑾長閑居士

十一月七日　儀

以上三つの向ひにたてる四ツ

（左側ニ）伊勢登平貞敦

天明元丑年

梵聲院殿　安鑾了慰居士

七月十三日

明和四丁亥年

智性院殿　法鑾惠光大姉

五月朔日

（左側ニ）伊勢万助平貞春妻

寛政四壬子年

香蓮院殿　熏鑾涼心大姉

八月二日

九

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143

ガラス使用

宇永七戊戌年

貞壽院松巻良閑大姉

二月初八日　伊勢氏

以上四つの左側の方へ向立たる三ツ

文化九壬申年

寥廓院殿雲巻心岳大仙居士

十二月廿四日　（右側）伊勢万助平貞春墓

（左側）伊勢家　貞益三男　貞友女

寛暦五乙亥年十月四日

威徳院殿儀巻至道居士

弘化三丙午年十一月廿五日

香譚院微妙貞孝立里ノナ

文天四日子年正月廿八日

春曉院覺夢清香立里ノナ

伊勢權左衛門次男

俗名伊勢甲子三

甲

（右側）伊勢万助平貞春後妻

文政六未年

幽玄院殿通巻觀達妙善法尼

十月十四日　（右側）岡野作兵衛平房保嫡女

大養寺の遺物

一　貞丈翁の畫像　大養寺の所藏

此年十二月のうきくりて　漸く三十一年六月廿一日によりつ

畫像の上に

忘しは是は果たしたるに見えし

いを我乃海士恵嘉志やなのみ

動の表書にて

伊勢平義貞丈之像

男貞輝

十

畫像の側に
右側　伊勢桃左衛門貞輝作之並筆
左側　松坂飯島源勝休謹寫

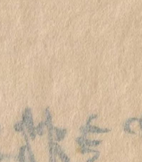
一　小烏丸太刀の圖かきへたりし詞書のうつし

天保十一庚子六月十日旅人来りて途に落し新司谷村出崎
の里江戸浅草鳥越二ッ門前の庸丈初五郎か家に枕を宿せしに
其人小烏丸の太刀の圖と貞徳家の古き短冊を所持せし
初五郎か身の上を問へまゐりて其身の足もと鏡にかよへて伊勢の
旅人答へ某は此をつらぬ常陸國久慈郡中の湊の商人
雨宮利兵衛といふものなり呉服のあきなひかたがた諸國に
網をおろして右の品々を得たるにこれは京都にて見せるに家宅
にしかるに千貫の價あるよしなれど江戸にても来よと
ふことありて出まかせて行くに中野坂の内にて行き合ひ
荷を失ひて宝もそのかへりて二ッのものと見えんと
こふて其由来あるを語りて旅つくこの中より出しこそたり小烏
丸の太刀のうち八葉の伊勢氏のよしをきくるにかへさ今此

守をはなるゝ貞丈の筆なるけはしさ出るはものとなりける
短冊八一条兼冬卿白忠良公の筆と宗祇法師が筆なりし
某年の間大かたよみてえりしにこのえうち庚申初五郎か家に宿り
寄筆某年より貞丈この二つを拝して帰りの後も

庚子六月

庄山賢書



唐家中田五郎助資之手辺神楽坂の西丸清光所預奥津
甚[illegible]ゆしへ[illegible]去年の夏比屬を守
せしるをとかつりしに比今は比春の恩を示せられ
ゝ今日見ず月しといはれたれ[illegible]資之おりてあたも
見しまかの恩といさこうもたらふるたゝし事也もこれ[illegible]
しさ見したる緒の組ゝ少し[illegible]かの恩のハ[illegible]
うちの赤綿[illegible]田といふものことしといへりおの辺おもふ
原本に一枚なる之れを[illegible]
る之し且奥津氏のまハ前に貞丈の序ありて奥に
比島を[illegible]を[illegible]資之なし[illegible]
如尼

小鳥丸太刀圖序

朱雀帝承平壬辰平將門叛天慶戊戌將門
誅吾祖平國香明年庚子國香子貞盛射倒
將門藤原秀郷斬其首朝廷賞功授官爵
貞盛箭并罰國賊今父仇因重賞賜小鳥劍
今唐皮鎧甫來嫡子相傳自貞盛至貞丈凡
三十代自天慶庚子至明和戊子凡八百二
十九年也唐皮應仁兵火燒亡小鳥免災今
尚存貞丈自画其象是貴其靈器之餘也

明和五戊子秋八月朔旦　伊勢平藏貞丈序

その奥也

同小性組山田肥後守組伊勢万助家傳小鳥
丸劔并圖寛政七年乙卯秋九月廿三日備
古覽奉命彦根善意摸寫其圖

十二

辛丑の夏五月十四日

一　賢台再書

一　大炊寮主水の由緒書

御内儲書

一　當寺ニ記ニ云ク慶長十六辛亥年
二代将軍乳母觀音院殿御建立之
御内井大炊寮殿水神殿地別水井
御清水殿堂殿等之御
有之ニ築地御下ニ寺号堂大屋形有之
江戸御内元和七酉年　二代様上意有之
卯

御内儲書

一　慶長十八丑年
東照宮御内儲新ニ御
神君様御年齢十五之御時　二代様御籠
御ニ成書面の分御内儲の法之如
下ニ我等新ニ相定之　上意有之
けれとも文ニ母様ニ免御側近ニ寄有之
七月御内ニ入御ニ成
殿ニ御ニ成ニ付　神君様御月令
遠ニ御ニ成　御熱病ニ令有之ニ御ニ成
御感深ニ御則
二代様ニ遣せられ候ニ付ニ実ニ有之ニ天下
二類ニ　御内儲新ニ二十年称之の年ニ被
中八

十三

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

貞丈祭典の扣

大養寺靴事

十一月

右の畫像の事ハ、誰王海毎談に見えたり、（但し毎談にハ山ざと、ちがひたりと覚ゆ）

右の畫像の事ハ、自畫ざんを書いて見えたり

貞丈翁を知れりし人

我と其心を同くして翁を慕ひ、翁を懐ふ人ハ世にあらじと我思ふ、しかるに今もたぐひ此翁ありて、ここにも其様なる事あるハ、具いとつゝましく我ものとおもてこゝなさゞる人の有る事を聞くにおほろけならず、おほろけならずハ具いとつゝましく我ものとし、ずしのたくる事有れバ、取也して翁をおぼろけなくおもひ、うく思ひなすよりしほど、玉の臭柱をよそにおきて、佛法を心きよくおもへるがごとくにいへる俊をもて、そこにして我心と同くく翁を

急ひ慕ふ人を得たり、篤胤大人即是なり、其條にいたく伊勢の貞夫ぬしハいたゐる有職故實の学びに委きた、更にもいたく其心の雄々しくて、真の道をも、且々たゞ心得らきし人なるが、それ齢七十近くなりける時に或人の年老されば、念佛して後世を多きかり祈と勸ひ給ふにさへて、三十七首相詠きて、其中に世を見佛の道を尊むは、心なるに慾ふかき人」まことに孫院佛ひ云来るとはむらさきの、雲なれ知らむ乃多ぐひなる名字」はさに常ならぬ世をなかく出そ愚なき、うれりこゝろ天地の道」といふ詞なるとあの人魂に桂のいかめしく立さらしかたまきかうはいはめやと云々

これらの事を見聞して翁が奥城の後の世に存むべく計らハん、今ハそを計るの人なし、ひとりして今の世にあらまほしきほどになりましと、心に思ひつゝけたりしなり、おほ今もかゝるをりしも、或人のみまつりせん、石垣をおどいふにあひて、よろこびて、その人のなをべきほどのみかげかゝふれるを知れば力るしつ、さてみまつりせんとてする、志かるに其石垣つきし人ハことありとてみまつりにつかへがりけり、又仕へん人おも有らむ、石垣ハ其まゝ置たれど、かゝのねつゝならべたる様なる心ちせらるゝもをかし、其人ハ石垣をもて、あれたるをみづからのことのくたりと見せんがためありしのど其様ハいかぞ、いとくハしう其人の名もと思へど、心まきなき人の様々をいたんいとまをしけれバかゝぞ

さていかに世ましと考へつべき時になりぬれども、幸にして反りてよろこばしき事と變しぬ、それ翁のみたまのめぐミたまふ所なるべし

我心と同しく翁を慕ふ人出来 川崎千鹿氏即是なり

十五

千尻氏の思ふところ我思ふところにかなへり、つひにみまつりとぞ
仕へつる事を得よりき、まと翁がみたまへ、此上にもめぐしまして
我をたすけたまへり、此有職故実の学の法にもあらぬ人をも
さをひきまして、此童をたすけさせたまひぬ、伊藤富三郎氏が
祭の場の事につきて、廣田華州氏が賛助見の事につきて我ところ
を毎かわしめ、終に祭場のそなへうまく、祭式の順序ハ川崎氏
に依て見にくからぬ、拝礼者ハ集古會員に依て満たされたるな
ど、翁がみたまにむかひて心もづかしからぬ程に人々にたすけられしなり
扨其祭りの日の様ハ おもかゝ花の如くなりき

明治三十三年四月廿八日

日本橋區濱町二丁目 日本橋倶樂部 ニテ

祭典執行 午後一時ヨリ 同六時ニイタル

神床ノ贄

餅 モチヒ 櫻枝ニ取掛テ 二

菓 コノミ 二

鳥 ウヅラ 四

鯛 タヒ 四

櫻木ノ机

酒

米 土器 紙立

鹽 土器 紙立

（十六）

伊藤家三十五代 貞丈畫像

廿二代 貞國 薫像　廿九代貞爲弟 貞興 同上　三十六代 貞春 同上　一

鯉 コヒ　四

鮒 フナ　四

甘菜 アマナ　二

辛菜 カラナ　二

右神床立様也

祭主

白素襖ニテ神鉾ノ様ニ跪鉾人奉贄ニ匍匐主ニテ贄ヲ捧グルノ式アリ

奉贄　二人　梅子　直子

習礼　演習

第一　足利時代出陳之式

主將代　廣田華州　白小袖赤大口　壷脛巾革足袋

双添　川嵜千帛

同　小堀鞆音

數皮

一 緣塗烏帽子　鉢巻白　一 鞢　鶉巻草　右左

床几

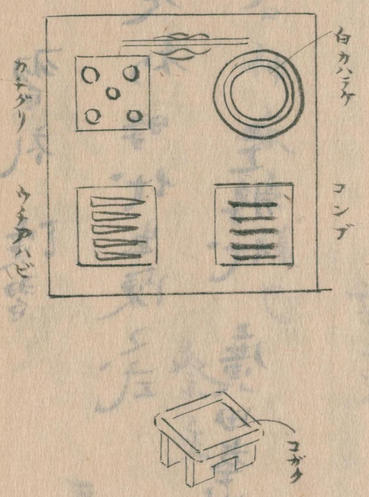
一 護り帖紙　一 膝鎧

一 小手左右　一 喉輪

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

一 鎧直垂 上下 萌黄顕文紗
一 膕當 左右
一 貫 左右 熊
一 脇立
一 鎧 紫裾紅 梅且弦走 袖付属
一 上帯
一 刀 紫檀柄
一 太刀 金作 熊皮尾鞘
一 扇
一 逆頰箙 征矢鞭 上帯引

出陳肴組



至鮮代

一 銚子 サシナベ
提子 ヒサゲ
一 うちあはびをくひて 之土器
二 かちぐりをくひて 之土器
三 こんぶをくひて 之土器
銚子 トル
提子 トル
肴 トル
一 烏帽子ヲ折ル
一 兜 鍬形

石井門人
中村兼太郎 直垂 珍烏帽子
同 中村銕次郎 同 根岸武ヨリ借用ス

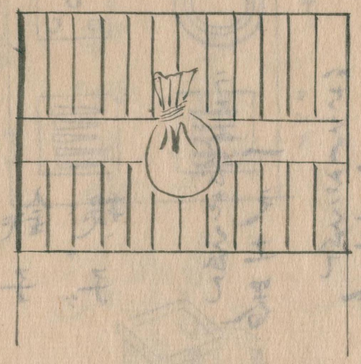
国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

一弓 重藤

以上

第二 双六盤出シ様

客 主人



役人 石井門人 坂上靜 肩衣半袴

一 客 主人 對座

二 双六盤出シ

三 コマタツル

四 双六ノ佐叡ヲ振リテコマヲヤル

五 双六盤ヲ引寄テコマヲ納メテ退ク

六 客 主人 退座

第三 庖丁刀式

神前之鯉

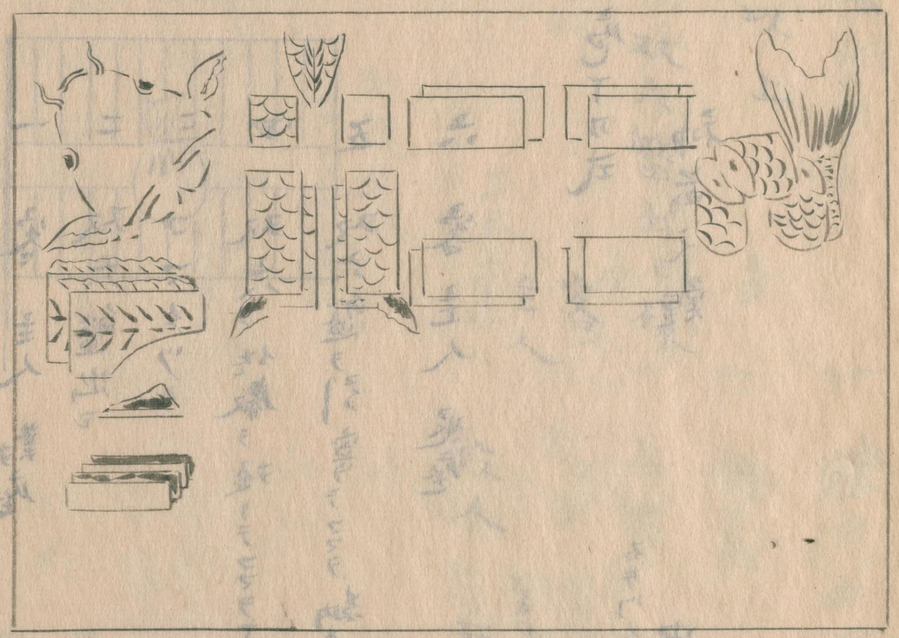
石井門人 中村己之吉

板舁 二人

从添 一人

国立国会図書館 タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用



右庖丁式ノ手續ハ童ガ著ハせる日本新理法大全といふものなき書このせたり

第四　貝覆の仕様

貴人　女房　十一人　内一人出し貝ハ役人

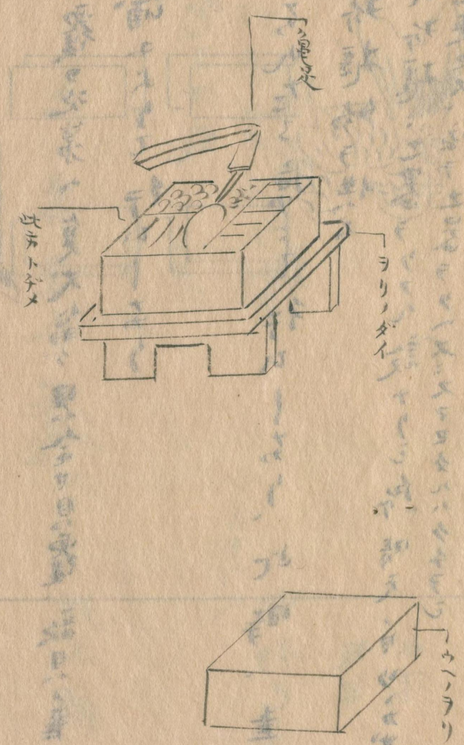
右貝覆の次第ハ貞丈翁ガ貝合せ貝覆、歌貝ハ事をかゝれたる二見浦によりて行ひしなり

これハへなれたる席にて行ひしなり、此時、書ノ籤陳列場の前にて、折樋物ヲ供ス

此折樋ニ土器ヲソフル設ナリシ所晴天ノ日ツヽカザリシトテ出来セズ、依テ土器ヲソヘズニスマセタルハクチヲシ

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

第五　琵琶出シ様

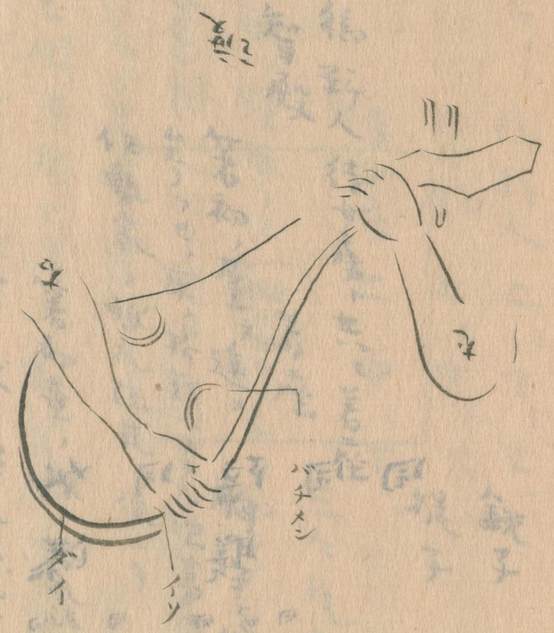


渡シ手
受取人

石井川人
榊原静太郎
合田検校
二十家一曲ヲ弾ス

第六　鹿下刀式

水切之鯛



治兵衛第
石井義昶
板舁　二人
奴添　一人

二十一

第七　婚迎ヒノ式

役人

智殿　白素襖袴　中村梅子

御料人　白衣袴　越藤直子

侍女房　白衣袴　北濱野

从添　同　山崎登久

同　同　大原　土岐志津

陪膳　同　山脇波奈

同　同　川合止美

同

銚子　波奈子

提子　止美子

御料人　待女房ト共ニ着座

智殿　着座

箸初ノ墓ヲ進メ胸の守を御料人ヨリトリテ智殿ヘ

參ラセ、床ノ折釘ヘカクル次第ヨリハジメ

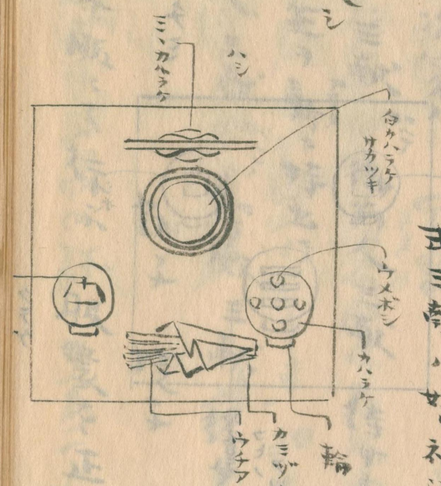
伊勢家ノ婚礼法式ニ依レリ

箸初墓ノ様ハ婚礼法式ニノセタルガ如シ

式三献ハ婚礼法式ニノセザレバコヽニウツシツ

式三献

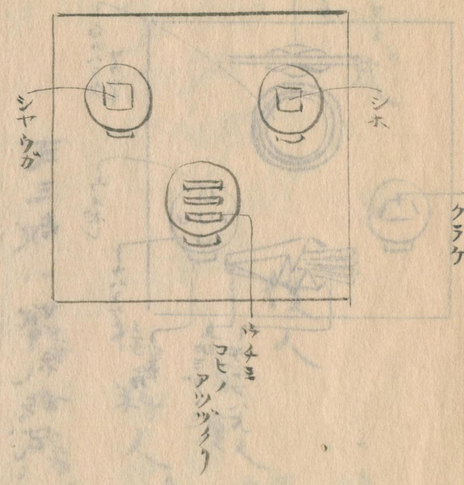
本膳　引渡シ



国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

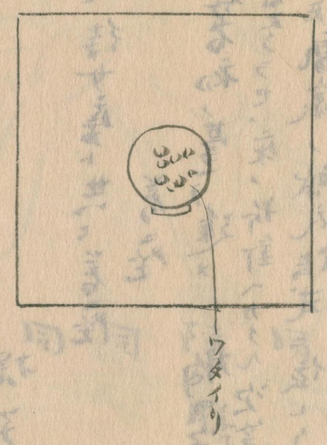
二の膳

ウチミ



三の膳

ワタイリ



右ニテ 御郷人 上ニ 中ニ 下ニ
智殿 上ニ 中ニ 下ニ
待女房 上ニ 中ニ 下ニ

三々九度

次ニ式三献ノ膳取リテ銚子提子モ取リテ、五献ヲ進メ、其ノ五献ヲ取リテ又七の膳ニユヅケヲ進メ、其七の膳を取て食膳三を進めて盃取カヘセシアルヲ略式トシテ

右の三膳を据たるまゝ別ニ盃の量を持出て、取かわせを

おき、其次第ハ

智殿 三献 ガヘテ 御郷人 三献 待女房 三献

盃ヲ新(アラタ)ニ持出テ

御郷人 三献 ガヘテ 智殿 三献 待女房 三献

銚子 提子 別

右ニ於て略服にて行ふ、服裝を正さんとすれバ反て近世の

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

小笠原と稱せし礼節の様と見違へん人も有るべく思はるればあり

右のほかに　笠出し様　鎗受取渡し　太刀受取渡し

鼓の出し様を行ふべかりしを、時うつりければとゞめつ

右の習礼と用ゐし器物ハ

甲冑（ちろひ）　川崎千席氏所就

双三盤ト貝桶　伊藤富三郎氏所就

笠　根岸武香氏所就

鎗ハ伊藤氏　太刀ハ根岸氏　鼓ハ梅若氏より借用しつ

以上

諸家秘藏書籍　武器　御出品被下ル扣

二種　菱田忠君

一冊

寛政分本　結乃記

一冊

貞丈家訓

四種　松原佐久君

武器考證　自筆本

一冊　〆本ニハアラズ オホキヲイトヒテナリ

雜記　礼法祝儀部　同

一葉

楠公像画賛　雲且ケ

一葉

貞丈校訂多賀常政所就板谷慶舟三ツ物圖

六種　村田直景君

犬追物類鏡　四冊

笠懸全記　一冊

二藏高叢書之内　一冊

貞丈先生雜著之部

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

一 軍器考 神正評 二冊
一 軍器考 餘評 一冊
一 軍器考 首書抄 一冊

二種

一 雜威腹差 小堀藹音君
一 大立擧膳當 壱領
壱双

四種

一 八幡太郎義家勿来ノ関 詠哥ノ圖 今村長賀君
先生筆 貞丈門人土州藩小谷左近助守本珍義セシモノ 壱幅
一 小鳥丸太刀模造 大同小異 伊勢家重代 但玩弄品トモ鎬小セルモノ 壱振
一 同太刀ノ圖差物 壱軸
一 小鳥丸太刀ノ模造 刀身水心子正秀川古山弘元作

二十三種

一 笠拭全記 寶暦八年 有住帯子君
一 位署式私考 一冊
一 日本紀神代差獨見 安永七年六月 一冊
一 大松問答 大腸八右衛門重庸 松岡次郎太郎行義 延徳年中 一冊
一 烏帽子折問答 一冊
一 軍用雜記 苔命 小笠三家 一冊
一 古折烏帽子之圖 一冊
一 雜記 礼法祝儀之部 一冊
一 類聚産所式 有住齊編 草稿 四冊
一 矢開法式 一冊
一 鞍緒留様 小笠原古傳 安永四年貞丈字 一冊
一 馬上沓考 文化二年 藤忠憲記 一冊

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

一 小反刄　右同記　一冊
一 熟語臆断別勘　安永九年七月　一冊
一 直無考所録　安永三年五月　合一冊
單異考擬疑上中下
一 山岡考説後書　安永五年九月　一冊
一 源家八領鎧考　安永五年十一月　一冊
一 安齊遺艸　一冊
一 箙之書　一冊
一 逆類箙事　一冊
箙矢搦鉄傳　六巻
一 刀劔問答　宝暦癸未年十月　三冊
一 進退記　七冊
一 座右書　二十丸七種　閲墓雄君
一 婚礼問答　宝暦九年　一冊

一 敷寛秘抄　寛政十二年七月　十二巻所見内一十七　二冊
一 忠貞問答　一冊
一 石貞問答　一冊
一 嘉問貞答　一冊
一 女房文々考　一冊
一 沸成之記　貞陸著述　一冊
一 習礼抄　一冊
一 連判之事　一冊
一 奉公人両覚悟事　但受取渡之記　貞陸著述　一冊
一 人唐記　一冊
一 琵琶甲安郡考　一冊
一 世継物語考　安永六年　一冊
一 片口銚子の事　一冊

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

一 職人歌合詞書の内難解 一冊
一 鳥柴考 一冊
一 笑物考 一冊
一 和字衆説 一冊
一 筆像考 一冊
一 鷹墨居 伊勢加賀守貞助 一冊
一 貞為聞書 一冊
一 武家装束着用圖 寛政二十年 松岡佐方 一冊
一 貞丈雜記 礼法祝儀 人物 人名 小袖類 烏帽子類 三冊
一 服色圖解 初編 後編 文化十三年 本間氏著 二冊
一 進退記 六冊
一 著書目録 一冊
一 貞順色々記 一冊

一 種 根岸武香君 二十巻
一 武器考證 一種 山名義海君 一冊
一 名目抄 自筆ノ註 二十一種 吉川三郎君 一冊
一 貞丈翁口授聞書留 一冊
一 故實稽古掟 一冊
一 道照愚抄 一冊
一 請取渡之記 一冊
一 銚子提根元 一冊
一 庭乗之記 一冊
一 貞順古實集 一冊
一 鞍轡工記 一冊

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

一 諸道具請取次第 一冊
一 首實檢法式 一冊
一 婚入之記 一冊
一 式三獻湯漬之次第 一冊
一 公儀方法度并伊勢守掟 一冊
一 軍神問答 一冊
一 膳部類 一冊
一 元服之記 一冊
一 鎧着用初法式 一冊
一 出陳聞書 一冊
一 元服法式 一冊
一 太刀折紙請取渡 一冊
一 小笠原鎧傳記 一冊

四十六種

一 馬具寸法 伊勢貞爲自筆 同 貞丈奥書
一 萎烏帽子書 伊勢貞丈自筆
一 大坪騎方口吻卷 同
一 駁馬故實 同
一 伊勢鞍鐙由來記 同
一 吉田流弓材之書 同
一 幼学問答 同 同 貞魁奥書
一 善御譜 同
一 酌並記 同
一 弧矢考 同
一 武器考證目錄 同
一 軍用記 同

川崎千帋君

一冊
一冊
一冊
一冊
一冊
一冊
一冊
一冊
二冊
一冊
二冊
七冊

国立国会図書館 タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

一大坪流騎方繪圖　同　一冊
一秀幸論　同　一冊
一馬見参記　同　一冊
一巻藁射様　同　同　貞丈題奥書　一冊
一尾張国熱田社鉾馬考　同　一冊
一大坪流系圖　同　一冊
一善御譜序註　同　一冊
一手綱之秘書　同　一冊
一大坪流手綱切掛　同　一冊
一八條流騎方百問答　同　一冊
一大坪流馬術聞書　同　一冊
一笠掛式正之根本　同　一冊

一鞍之寸法　同　一冊
一弓細之秘傳書　同　一冊
一大坪流馬諸事　同　一冊
一鞍鐙工記　同　一冊
忠信胄圖　同　一巻
一進退記　巻六　同　零本　一冊
一圖入進退記　巻三　巻四　同　同　三冊
一當流手綱之秘傳書　巻四　同　同　二冊
一東鑑　巻三十二　巻三十三　貞丈校合　同　一冊
一水干考　伊勢貞春自筆　一冊
一當流手綱秘傳　伊勢貞春奥書　一冊
一戦場百箇條　伊勢貞春校合　一冊
女房装束着用次第圖　多賀常政自筆　大石真序奥書　一巻

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

以上

一逆頰箙　征矢鞭
一柳箙　征矢鞭　矢母衣
一塗箙　征矢鞭
一指箙　征矢
一竹箙　野矢
一熊皮箙
一葛箙
以上
一弓　村重藤
一張　弓袋ニ入
以上

一腰
一腰
一腰
一腰
一腰
一腰
一腰
一張
一張

二種

一指箙　貞丈書図ノ模造
一古製　臑當
一翁ノ畫像
一伊勢系圖　有住齋所藏字
一大養寺ノ墓標之記
一同　過去帳ノ内
一礼格傳授
一条々聞書
一四季艸　一本
一酌并記　三本校合

関保之助君
一腰
一双
大養寺
一幅
參主
二冊
一冊
二冊

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

一 玉ノ奥柱 貞丈歌ノ條ヲアラハシテ
一 四條流庖丁書 貞丈翁注
一 禁中年中行事 同
一 故實礼節 男礼ノ部 有住齊遺稿
一 結納の本末 自編
一 亀足紙立ノ圖 自編
一 誓礼法式
一 庭訓往来諸抄大成扶羽異
一 日本書紀要閑天皇錯簡考
一 源氏物語ひとりこち

下巻 一冊
一冊
一冊
二冊
一冊
一冊
一冊

出品場ノ掛り役
根岸芳郎
山本勘右衛門
坂上辨

包、結ノ記ヲのせる所の包結ノ物
石井割烹教場生徒出品

一 六葉結
一 上 美
一 竹 結 を、右
一 相生結
一 叶結
一 五行結
一 まむすび
一 蜻蛉結
一 竹緒ノ結
一 手箱ノ緒

以上古色ノ紐ヲ以て結ぶ 紐ハ伊藤氏ヨリ借用ス

三十一

参考 近世水引花結

一 菊　一 櫻　一 おでしこ

一 梅

近世包物

一 伸蛇　一 木の花　一 草花

一 菖蒲　一 伸蛇（シンアハヒカシラ）頭包　一 色紙

包記所載

一 凡き物ノ包形 おでしこうさね

以上

右ノ書籍及成蹟品ヲフリカヘタ是ハ根岸氏ヨリ借用ス

數物ハ伊藤氏ヨリモ借用ス

賛助出席人名 并發起人名 扣

若林勝邦　松原佐久　林若樹（ワカキチ）

三島通良　瀧沢又一　勝浦鞆雄

関保之助　柏木祐三郎　幸山小三郎

加藤二郎　小堀鞆音　井上頼國

巖谷季雄　柳原義光　山縣篤藏

宍道恒樹　村田直景　原秀四郎

川喜多嘉兵衛　竹内久一　武井澹如

礒田鳳章　中村幾太郎　安田靱彦

宮本玉纏　中野礼四郎　清水晴風

畑徳三郎　根岸武香　伊藤富三郎

梅若薫　山名貫義　今村長賀

山名義海　永井（山名氏ヨリ）　小谷勝太

小嶋亦次郎
磯部武者五郎
鈴木正秀
有住常子
日置仁平
上島松夫
中村己之吉
根岸亦佳子
日向野
橋本
平井
小嶋景信
宇都宮タカ子

岡 麓
中澤澄男
鈴木信比古
保坂峰子
大坪正義
壽賀野亦佳子
黒川眞道
森田千久子
相田
萬場米吉
小原利三郎
佐々木信綱 代
上島氏ヨリ 二則嶋

下村三四吉
清水米藏
小林眞子
峰百合子
吉川三郎
安田由岐比古
廣田華州
渡辺
橋本
都
毛利昌教
赤堀又次郎
同上 飯塚

杉浦 千之之子
星野勘七
西山
松本
伊藤氏ヨリ 白井
伊 高宮
根 長松篤兼
橋本 繁
井上氏ヨリ 久保惠鄰
右同 杉浦 二人
根岸芳郎
神職講習會員 感見彦治
右同 大西武雄

松井
野口ひさ子
橋本
清水 みきこ子
清水
伊 浦谷
有 長谷部せん子
海老原良三
同上 青戸波江
根 加藤直種
山崎十藏
同上 朝野登
同 三輪杉根

関葬雄
高梨静
中野氏ヨリ 田中
伊藤綾園
中澤蘭谷
根 境野大吉
山下重民
同上 田口勝
同 渋谷吉弥
飯嶋半十郎
同上 山本勘右衛門
同 大内岩太郎
林次郎

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』　請求記号 841-143
ガラス使用

神職講習ヨリ入會員

右同 橋佐古多仲
山根磐根
右同 牛尾楯夫
右同 葛城俊治
右同 阿保友衛
右同 宮崎丹弥
右同 藪 重正
右同 岡 直起
右同 有光宣秀
川人 中村兼太郎
同 大西忠之助 役名ニハ坂上辨ト書タル事
同 伊藤とよ子
同 山崎とく子

同上 鈴木信治
同上 廣瀬鎌之助
同上 柿崎千字
同上 古市熊護
同上 宮永雄太郎
同上 高崎多計志
同上 星野金藏
同上 小野官治
同上 小針常治
同 中村鉄次郎
同 廣角事太郎
同 近藤直子
同 山脇花子

同上 澤田寛
同上 白井禮次郎
同上 坂本栄教
同上 関一郎
同上 新居一郎
同上 澤田総重郎
同上 花井真幸
同上 田中識藏
同上 高橋幸之進
同 榊原静太郎
同 板倉ひさ子
同 北濱野子
同 川合とみ子

右同 大沢ふみ子
同 有住鎌子
同 藤本きよ子
同 中村濱子 欠ナレドミモスベキ事アレバ
後見 石井治兵衛
同 石井義昶
同 大谷きよ子
同 土岐静子

右ノホカ記シモラシタルモ有ルベシ

發起人 川崎千斤
同 石井泰次郎 条主
同 中村楳子 同補助

川崎氏ハ發起人のうちにと思ひしハ、其翁ハ武士のみちのをしへ志ゝひたまふにありてあり、こゝみハみつから童がいへをとひきまして、ことさらにたきけたまへるありけるし、楳子をしも發起人のうちにかそへたるハ我父のをしへ子のなりにひと

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

りたゝしき思ひたりもたる女なるにありてなり、此女よさきに
ハ時代料理のことをとりたゞして、童が心をやすからしめこりま
ことみハ童と共に八翁の奥津城を早くといはまして花を
さゝげ、まゝあるからにつきてハ近世伊勢家の礼節の教を
もとして自説をそへて用ゐられたりし松岡美即小笠原の礼節ノ本家の
うまご女(ムスメ)が家に名籍(ナツキ)をおくりしなど、共にこの童が心を
やすからしめぬ、いまゝ学ばざといへども伊勢家のつゝへを女にて
知るべき者ハこの女よとて祭主のつらなもと思ひなされたるなり
けり

童がこのみまつりの事ハ、中ゐにしてきえうせし者にそのかされしに
おこりてとゝに其まをけたなせしなれば、かくまでにまつりのにはにのそむ
人なからましと思へりしなり、川崎氏も志か思ハれしなりとか、この
祭典への日にさきゝちてたまけたまへる君にむかひてよろこひ(ごと)申し

あたれ貞丈がこゝろハ篤胤大人によりてたしめて世に現れ
ぬるがごとし、とハ玉の眞柱の詞につきてアラ思へることなり
しなり、そののちさゝめて大人によりて貞丈がみたまの世にとど
まれる様を知り得たり、そハ大人が述おかれたる詞の中に
貞丈が古眼今眼偏見臆見の事をいへる髓筆をあげて、すべて
いとよき説にて、物学ぶ者のよく心得べき事と思ふのまゝに、おの
が爲とて書いでぬとのべたまひ又
伊勢貞丈は謂ゆる有職の学武士の道の学に秀られし事は、
今さらいふまでもなく、實に古今にあたりて比類なきかむめり、
然るを俗にこの人を誹る輩多かれど、大かたは謂ゆる諸礼
家といふ輩、または此人の得られざる事を誹るにて、其ハいふ
にも足らじ、この人の著されし書、すべて百二十余部ありて、

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

尤も大部なる物は少けれども、武士とあらむ人は、皆よく讀べき書どもなり、さて又この人の学問は、有職古實の事のこならず道の事にも甚だく心を入れて、またよく学びの大本を心得られたり、然れば大凡世儒者などせかけても及がたき人なりけり云々

とのべたまへるなどにて知り得たり

祭典ハ、てらハごとなりし事

此度の祭典ハ童叟にして、翁がたまをなくさむるに足らざりけむなかなれ今の世の位ふりきことのみやあひの式ハ、かくせよと書をけいたせる古の式を習礼のうちにこめたりしか、これこそ此度の祭典ハ、たゞなき童叟なるしなれやまさそれのこならんみやあひの式の習礼のかたれ、聳殿なりて楳子をしも御料人ハと思ひかけおしべことき童叟も有りしなり、志かりしに、かへりて祭典ハ眞聽になりて、童叟ハ、かそことになり、ぬるせいとくちをしきい

右の扣書 御笑 抄かしと

さしあるに

明治三十三年七月

石井養次郎

根岸武香殿

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143
ガラス使用

841
143

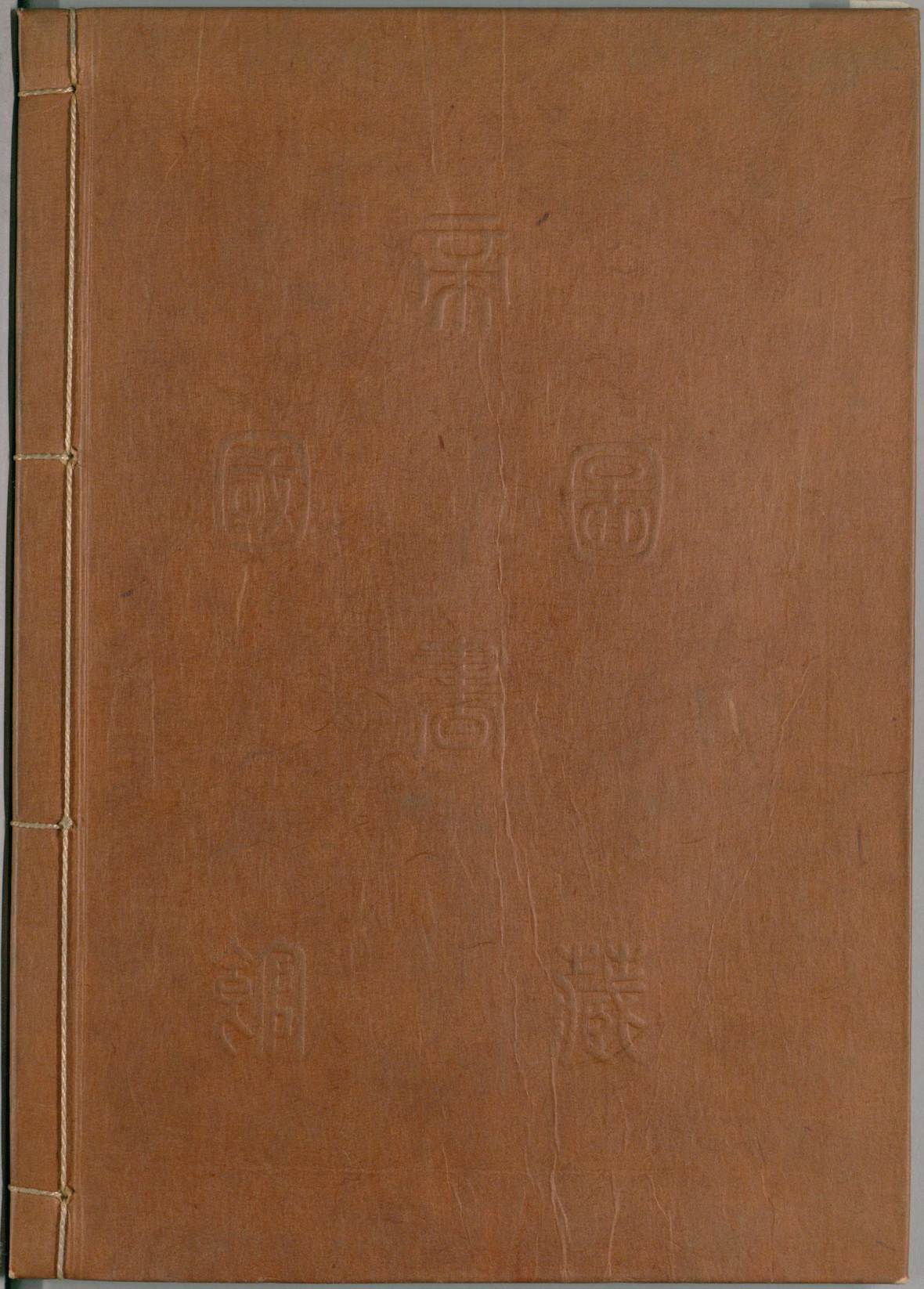
国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用

841
143

国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『貞丈祭典の扣』 請求記号 841-143

ガラス使用